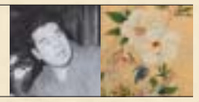

# 「黄蜀葵（とろろあおい）に翡翠（かわせみ）図」

伊勢長島藩五代藩主・増山正賢は、雪斎の号で知られる文人だった。当時は「風流自在」と尊敬を集め、今日では、花鳥画の画人として洗練された感性の息づく作品が高く評価されている。

CHRONICLE OF MIE VOL.2
【美術編】

山口 泰弘 やまぐち やすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

江戸時代・19世紀前期　絹本著色
94.6×31.1cm　個人蔵

寛政6年（1794）初めて江戸に出た出羽松山藩士相良助右衛門は、ある日、とある大名屋敷を訪れた。通された座敷に、助右衛門は目を見張る。

> 座敷は、残らず中国風で、亀甲石を敷き、壁は漆喰で塗られてことのほか美しい。長押には中国製（あるいは中国風）の山水画花鳥画の額や硝子絵など珍しい画が掛けてあった（※1）。

硝子絵は、透明なガラスに裏側から主に油彩で風景や花鳥・人物を描き、表から透明感を楽しむ。中国の広州で作られ、主に西欧に輸出され、日本にももたらされた。ともあれ、助右衛門はいきなり中華空間に投げ込まれたのである。おまけにこの家の主は、曲禄（※2）に腰掛けて彼を迎えた。主の名は増山正賢（ましやまさかた）（※3）、三重県桑名市にあった伊勢長島藩第5代藩主で、雪斎の号で知られる。初対面にもかかわらず、主は馳走で助右衛門をもてなしたが、器から箸に至るまで中国からの輸入物で取り揃えるという徹底ぶりに、助右衛門は舌を巻いている。残念なことに彼自身このときは体験できなかったが、懇意になると中国風のコスチュームに身を包んだ女中が給仕に当たることもあったという（※4）。

雪斎は、生前、高名な文人として尊敬を集めていた。相撲番付に見立てて当時出版された“文人番付”では、大関（当時は横綱ではなく大関が最高位）を超える地位、行司に充てられたほどである。囲碁・書・煎茶に関する著作があり、中華文化に対する造詣の深さがわかる。また、儒学に関する著述もあり、儒教的教養人としての学識もうかがわせる。

西欧諸国をモデルとして近代化が進められるようになる明治より前には、中華文化は精神生活の理想と捉えられることが多かったが、それに飽きたらず日常生活に至るまで中華尽くしという人は多くない。経済的裏付けを必要としたことも一因である。もっとも2万石の小藩の台所は、ために火の車であったらしい。

雪斎は多芸多才の文人であったが、今日、最も評価されるのは画である。とりわけ花鳥画の評価が高い。

春木南湖「増山雪斎像」

**増山 雪斎** ましやま せっさい
1754年～1819年

増山雪斎は、宝暦4年（1754）伊勢国長島藩主の長子として江戸に生まれ、23歳で所領2万石を襲封した。名は正賢（まさかた）、雪斎はその号である。雪斎の芸域は、多方面におよんでおり、著作を取り上げると、囲碁、煎茶、儒学、博物学、書などに広がっている。雪斎は花鳥画を最も得意としたと言われるが、その花鳥画はいずれも華麗な色遣いと写実的な形態描写を特徴としている。

享保16年（1731）、中国浙江省から一人の画人が長崎を訪れた。名を沈南蘋（しんなんぴん）という。南蘋の画は、鹿・猿・兎・鶴・鳳凰・孔雀などの走獣や鳥を花卉と取り合わせて濃厚華麗な色彩で描いた写実的な花鳥画が主で、その影響は、江戸時代後期、雪斎の時代になるとほぼ全国に拡がり、のちに南蘋派と称される一大画派を形成するようになった。雪斎は、今日、南蘋派を代表する画人の一人に数えられる。

今回紹介する雪斎の「黄蜀葵に翡翠図」は、紅色の小花を咲かせるサルスベリ、トロロアオイとカワセミという夏の景物が取り合わされた花鳥画で、南蘋派の作風をよく示している。その一方で、夏の強い日差しを白く透かすトロロアオイの軽やかな表現やカワセミの羽毛の繊細巧緻な描写には、雪斎固有の洗練された感性もうかがえる。流行の最先端を行く中華モダンのお洒落な画、同時代の眼にはそんなふうに映ったはずである。

深い教養と洗練された感性で中華文化に親しむ文人雪斎に、「風流抜群の人」（※5）、「風流自在」（※6）などと、当時の人は讃辞を贈っている。

（※1）池田玄斎『弘采録』（文化11年（1814）序・酒田市立図書館蔵）所載の「増山雪斎侯の事」の一部を現代語に訳出。「増山雪斎侯の事」は、庄内藩士の著者が支藩松山藩士相良助右衛門からの聞き書きをまとめたもの。
（※2）鎌倉時代に中国から渡来して主に禅宗で使われた椅子。
（※3）“増山”は、“ますやま”ではなく“ましやま”と読む。
（※4）※1に同じ
（※5）雲室『雲室隨筆』文政10年（1827）
（※6）金井烏州『無声詩話』嘉永6年（1853）

（左）雪斎は、博物図譜『虫豸帖（ちゅうちじょう）』の作者としても知られる。数ある虫のうち足のあるものを虫といい足のないものを豸というと、『和漢三才図会』（正徳2年（1712）頃刊）は記す。蝶は、彩色に金銀泥を交えて写実的かつ美しく描かれる。
（画像提供：東京国立博物館）

（右）雪斎『虫豸帖』。カエル・カタツムリ・ナメクジが描かれる。中国の本草書『本草綱目』（1596年頃刊）は、いずれも「虫部湿生類」に分類する。また、漢字では蛙・蝸牛・蛞蝓と虫偏で表記される。江戸時代の通念では、これらや蛇も虫豸に属した。
（画像提供：東京国立博物館）